

平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	管 28K01	氏 名	三田 典子
研究主題 —副主題—	特別支援教室における巡回指導を活用した特別支援教育の充実を図る校内連携の構築 —巡回指導教員の働きと校内システムに着目して—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	伊藤 良子
所属校	豊島区立目白小学校	校長	宮澤 晴彦

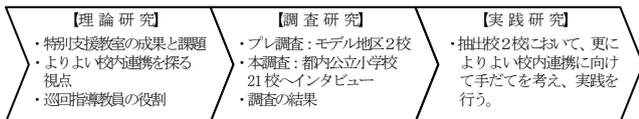
キーワード：特別支援教室、巡回指導教員、校内連携、教職員の自律性、

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

東京都は、平成 28 年 4 月より 3 か年計画で都内全公立小学校において特別支援教室における巡回指導を段階的に開始した。特別な支援を要する児童一人一人に十分な指導と支援を効果的に行うためには、通常の教育と特別支援教育が連携・協働するチームを構築し、学校の組織として取り組むことが重要である。その体制づくりにおいて、大きな役割を担うのが新たに各学校に配置される巡回指導教員である。そこで、本研究は巡回指導教員に着目し、通常の教育と特別支援教育が連携・協働する新たな特別支援教室における巡回指導の校内連携の実際について調査する。そして、巡回指導教員の働きや取組を明らかにしながら、特別支援教育の充実を図るためのよりよい校内連携の構築を考えていくことを目的とする。そこで以下の五点について検討する。

- ①校内連携の実態 ②巡回指導教員の働き ③協働による組織化のプロセス ④校内連携のモデルの提案 ⑤連携・協働に有効に働く校内連携の構築

2 研究の内容・研究の方法



3 研究の結果

<理論研究>

理論研究では上記の三点について、明らかにした。特に校内連携において重要な通常の教育と特別支援教育がよりよく連携・協働するために、佐古 (2011) の言う「教職員の自律性と協働による組織化」を目指す。そして、教育活動の内発的な改善を可能にする学校組織の成立要件として、佐古 (2011) の言う「情報交換と共有を行う場」と「協働プロセスの支援機能」の二点を重要な視点として、四者（以下四者とは、巡回指導教員、担任、特別支援教室専門員、特別支援コーディネーターのこと）の連携・協働の取組を中心について見ていく。

<調査研究>

- (1) プレ調査先行モデル地区の都内公立小学校

2校を訪問し、実態調査を行った。プレ調査の結果を基に、校内連携において必要な項目を抽出し、本調査で活用するインタビューシートと学校分析シートを作成した。

(2) 本調査及び結果

プレ調査結果から作成したインタビューシートを用いて、都内公立小学校 21 校で巡回指導教員、学級担任、特別支援教育コーディネーター、特別支援教室専門員、管理職を対象に半構造化面接方式でインタビューを実施した。インタビューシートは、①情報共有の方法や内容、②アセスメント、③指導内容の周知や取組、④児童・保護者・教職員への特別支援教育の理解啓発、⑤それぞれの担当に期待することの 5 観点から構成した。

本調査の結果は、以下のとおりである。

- ① 学校分析から見えてきた学校の校内連携 4 タイプ  
インタビュー内容を基に学校分析シートを作成し、共通項目 5 観点 30 項目 (表 1) について各学校の実態を整理した。その結果として、校内連携について大きく四つのタイプ「タイプ 1 充実型 (4 校)」「タイプ 2 順応型 (8 校)」「タイプ 3 分担型 (4 校)」「タイプ 4 個業型 (5 校)」に分類した。
- ② インタビューから見えた巡回指導教員の働き  
同じく、インタビューシートの項目を基に、四者の連携から見えてきた巡回指導教員の行為から、表 1 のような巡回指導教員の働きを見ることができる。

表 1 巡回指導教員の働き (筆者作成)

○教室での指導・支援の充実 (・教室での指導に関すること (教科・生活)・児童の実態把握、理解、対応に関すること)
○担任のよき理解者・支援者 (・相談・見守り・学級支援・保護者への対応に関すること)
○アセスメントに関する支援 (・専門的な視点からの助言・特別支援教育コーディネーターの仕事分担)
○特別支援教室専門員の仕事内容の指示・支援
○教職員の特別支援教室に対する意識の共有 (・みんなで支援していく意識)
○児童・保護者・教職員の特別支援教育に対する理解・啓発

- ③ 巡回指導教員の自律性の形成からみる協働による組織化のプロセス

さらに、巡回指導教員を取り巻く周囲の環境がどのようにあれば、巡回指導教員の自律性を育むかということをはっきりとすることで、協働による組織化のプロセスがそこに表出されると考えた (図 1)。

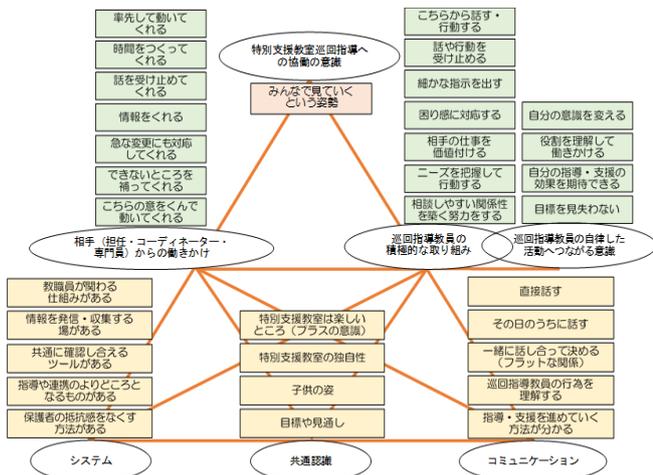


図1 巡回指導教員の自律性の形成から見た協働によるプロセス（筆者作成）

④ 本調査から導き出されるよりよい連携のモデル例

よりよい校内連携の姿とは、タイプ1のように校内システムが四者の連携を円滑に動かす土台となり、四者の双方向性のある姿であることが見えてきた。そこでタイプ1であるA校の取組の事例の「連携の土台」について具体例を表2に示す。

表2 連携の土台となるシステム・コミュニケーション・共通認識（筆者作成）

システム	コミュニケーション	共通認識
<ul style="list-style-type: none"> <li>特別支援教育コーディネーター2名（養護教諭・巡回指導教員）の連携体制がある。</li> <li>巡回指導教員（主任）による校内研修を行う。</li> <li>生活指導夕会で巡回指導教員からの話を設定する。</li> <li>4者の連携に管理職の関わりがある。</li> <li>定期的な校内委員会の開催（月1回）に巡回指導教員が出席する。</li> <li>4者が連携型個別指導計画をツールとして、めあてを共有する。</li> <li>特別支援教室専門員の仕事に対し、指示・価値付けを行う役割を巡回指導教員が担う。</li> <li>臨床発達心理士の巡回には、特別支援教室専門員が同行する。その後、特別支援教室専門員が児童観察のフィードバックを受け、巡回指導教員や学級担任、管理職に報告する。</li> <li>就学のアセスメントのやり取りを2名の特別支援教育コーディネーターが協力して担う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>朝や放課後など、直接会ってその日のうちに話をする。</li> <li>巡回指導教員と学級担任が気軽に話をする。（フラットな関係づくり）</li> <li>先取りで授業の内容を行う。補習も行う。</li> <li>巡回指導教員が教室で給食を食べる。掃除の様子も巡回指導教員が見に行き、時には支援する。</li> <li>児童が巡回指導に行く際、学級担任や児童が「いってらっしゃい」と送り出す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導目標の共有を学級担任と行う。日頃から児童に付いた力を共有して取り組む意識をもつ。</li> <li>「一緒にがんばろう」という気持ちも共有する。</li> <li>特別支援教室の捉え方を苦手な子が行くところではなく、「少ない人数で自分に合った勉強ができる」という共通認識をもつ。</li> </ul>

(3) 本調査結果から見えるよりよい校内連携の姿  
本調査の結果から、よりよい校内連携の在り方について必要な事項とその具体的な取組が明らかとなった。協働による組織化のプロセスは、図1で示したように、①図1で示したそれぞれの要素を含む「システム」、「コミュニケーション」、「共通認識」という土台がある。②巡回指導教員と学級担任、特別支援教室専門員、特別支援教育コーディネーターが相互に積極的な働き掛けを行っている。③さらに、そのような関係性が構築されると、巡回指導教員の自律性の醸成が見られるようになる。この土台ができていないと、四者の自律性が育まれず、十分な連携体制につながらないことが見えてきた。

＜実践研究＞

そこで、それぞれに取組が行われている学校において、更によりよい校内連携へとつなげるために、手だてを考え実践を行った。連携の土台づくりの段階（抽出校タイプ3）と、更に連携の質や教職員の

自律性の向上を図る段階（抽出校タイプ1）において、巡回指導教員の働き掛けによる手だてを考えた。そして、それぞれの段階の抽出校2校において巡回指導教員に実践してもらい、その結果を基に考察した。ここでは後者の取組を報告する。

【日常的な連携の充実】（抽出校タイプ1）

①手だて：情報交換の内容の連続性と質の向上を目指して、巡回指導教員と学級担任との情報交換の際に、記録担当として特別支援教室専門員を意図的に情報交換の場に同席させる。また、連携のツールとして連携シートを活用して情報交換を視覚化することで、目標の確認と指導・支援の連続性を図る。さらに、メンバーの自律性を促す巡回指導教員による支援を充実させるために、巡回指導教員に働き掛けの一つである「よき理解者・支援者」の側面を意識して、学級担任と特別支援教室専門員に関わってもらおう。支援型リーダーシップの4観点「自己決定をもてるようにする」、「有意味性を高めるようにする」、「自己効力感を高めるようにする」、「達成感を高めるようにする」を用いたチェックシート（4観点15項目）を作成し、巡回指導教員にチェックをお願いし、この観点を意識して働き掛けを行ってもらった。

②検証：C校の取組において連携シートは、「特に課題が顕著な時期の児童に対する連携」、「経験年数の少ない学級担任との連携」の二点で効果が見られることが分かった。さらに、「メンバーの自律性を促す巡回指導教員の支援」について、特別支援教室専門員の主体性が大きく向上した。インタビューからその要因については、巡回指導教員の支援的な働き掛けによるものであり、支援型リーダーシップの有効性が確認できた。

4 研究の考察

校内連携の体制づくりにおいては、表2で示した「コミュニケーション」、「システム」、「共通認識」の協働のための土台が必要であり、土台を盤石にすることで教職員の自律性が向上し校内連携の充実が図られる。また、巡回指導教員の働き掛けは、校内連携の体制づくりに大きく寄与していることが明らかになった。一方、巡回指導教員の働きを生かすためには、校内システムを充実させていく必要があることも明らかとなった。

5 今後の展望

明らかとなった巡回指導教員の働きを校内で十分に生かしながら、更にチーム学校として教職員だけでなく、保護者・関係機関などの関係性も鑑みながら、特別支援教育の充実に向けて、よりよい学校組織の姿に近付けるための取組を模索していく。

